

東京、2001年6月26日

ピエールへ、

とりとめもなくしたためます。君は「日本が気に入らない」と言ったね。僕は益々好きになってきたよ。

夜、街の明かりはとても特殊で、ここで使われる資材はどこまでも平凡だけれど、光を奇妙に、優しく、ぼんやりと反射し、ほとんど信じられないほどだ。通りの幅はまるで彫刻を「成している」かのようだ。どこか均整が取れている。何に釣り合いが取れているのかそれははっきり分からない。君も知っているけど、ここは地震が多い。

都市づくりにもそれは影響している。家と家の間はひっついておらず、すき間を隔てて隣り合っている。用心のためなのだろう。一軒倒れても隣が倒れないように。それに家々が離れていれば、揺れても大丈夫だ。それらが美しい場所を作り上げる。家と家の間の割れ目、すき間、空いた傷、広げた脚のような家々。それらの空間はまるで彫刻のようだ。

人が通るには狭すぎるすき間。忘れるには広すぎ、見捨てるには便利すぎる。多分他の国でもそうなのだろうが、アジアのこの国では雑草は大切にされている。

その雑草が人が入れない所にどんどん伸びる。最も驚くのは、そしてきっと理にかなっていることなのだろうが(多分双方とも同じことだろう)、日本の家に言えることが日本人にも当てはまるように僕には思える。彼らの間に空間があり、空間は揺れを思い起こさせる。

友情をこめて